
Brain Install -ブレインインストール-

なまねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B r a i n I n s t a l l - ブレインインストール -

【Nコード】

N 2 4 0 4 V

【作者名】

なまねこ

【あらすじ】

17歳となったアルセアは、親の顔も知らない独り暮らしのただの女の子だった。ある時、立ち寄ったケーキ屋で出会った若い男に奇妙な話を持ちかけられる。

その内容は、1年間逃げ続ければ、3億円が手に入るというものだった。怪しみながらも取引に応じるアルセア。

死の恐怖と、人間の愛と憎しみの間をさまようアルセアの運命は果たして・・・！？

I n t r o d u c t i o n

背後から足音が聞こえてきた。

頭が重い。徐々に息が荒くなっていく。

それでも私は……逃げなければ。

固いアスファルトを叩くように走り続ける。

片方の靴が脱げた。お気に入りの靴だったのに、でも、拾う時間はない。

どこへ行っても同じ景色。どこにいるのかもわからない。

闇雲に十字路の角を何度も曲がり、右、左、右、左……。

どれだけ逃げても、不気味な足音は消えない。

坂道を駆け下りて、また上り坂。

血の滲む腹部がズキズキと疼き、薄い霧が徐々に濃くなっていく。

私はゆらりと足を止めた。

行き止まりだ。

塀は低い。助走をつければ登れるはずだ。

二歩下がって、悲鳴を上げるアキレス腱を無視してジャンプした。

視界がゆがむ。目の前は青空だ。嫌気が差すような白と青。

光はないのに、眩しい。

最後の一步を踏みきって、塀を乗り越え、さらに飛んだ。

赤い屋根。頂点から頂点へと飛ぶ。

黒い影も同じ道をなぞって追ってくる。

遠くで爆音が聞こえた。

あの人だ。

私も戦わなければ。

ほとんど自由の利かない右手に集中する。奇跡的に、それは動いてくれた。

全てを巻き込み飛ばす風をイメージする。

水色の、LEと書かれた右手の焼印が徐々に深い傷跡のようになっていく。

手に、足に、背中に、空気が吸い込まれるように集まってきた。足をまた止めて、振り返る。

「死ね！」

誰かの声が聞こえた。

何も分からず、私は全てを吹き飛ばした。

A r e a l w o r l d

30年ほど前、隕石の衝突や度重なる地震、火災という天変地異が起こった。

世界人口は一瞬にして五分の一にまで減少し、土地は無数の島へと分裂した。

そんな世界の隅に、ハイゼン島という小さな島があり、その中心には”私”が通っているハイゼン学校がある。

教師が優秀なことで有名なこの学校には、うつつしい飛び級制度があり、

そのおかげで私の周りには年下の秀才と呼ばれる生徒ばかりが集まっている。

使い古されたペンとずれ落ちそうになるメガネを常に持ち歩いているような、

化け物みたいな人間が必死で勉強というものをしているのだ。

6月20日。

その日、ウィーンウィーンと耳をつんざくような、妙に間近に聞こえる蝉の鳴き声が教室を満たしていた。

普段はうるさいだけの教師の声が問答無用で消されていく。

机の端に置いた腕時計の針がいじつたらしく動いていくのを眺めながら、今日も私はノートを隅々まで塗りつぶす作業にあたっていた。バサリ。

その手の上に、薄っぺらい紙切れが乗っかる。

進路相談、と特大の文字で書かれたプリントだ。

今は高校2年生の夏。大学への進路先を決めるのに、もっとも重要な時期が訪れたのだ。

しかし私は表情一つ変えることなく、音をたてないようにビリビリと破いて後ろのゴミ箱へ捨てた。

蝉の鳴き声が一瞬おさまると、一年前にも聞いたことのあるような説明がちらりと耳をよぎっていった。

私は今、一年前と同じ勉強をしている。

そう、つまり、落第だ。落ちぶれて3年生になれなかったバカな人間だ。

さすがに今年落ちると高校を追いつかれるので、多少の危機感は抱いている。

しかし、もうここまで来ると本当に勉強なんて無意味じゃないかと思えてくる。

行きたい大学だって、就職先だってない。アルバイトをしようとか何件か回ってみたが、

大抵面接の前に申し込み書さえ渡してもらえない。私の顔には生まれつき斜めの大胆な傷があり、目つきも妙にきつい。

暗い顔をしていればそれだけで不良の出来上がりだ。

夕方、ホームルームが終わると、友達と話すこともなくすぐに帰る支度をし、帰っていく。

受験以外に目がないこの学校では珍しいことではないが、さようなら、と言葉にも出さずに教師に向かって、あるいは教師に向かいもせずに、しているのかさえわからない会釈をし、

掃除の手伝いもせずにそそくさと帰って行く私は、きっと無礼な人間だと思われるに違いない。

まだギラギラと目を光らせている太陽に見つからないように、建物に沿うように歩いていく私。

いつもならまっすぐ帰る道を、今日は曲がっていく。

鞆から財布を取り出して、細かくなった小銭をいちいち取り出して数えた。

240円。

3年ほど前まで住んでいた施設から、毎月ぎりぎり暮らしていける

ほどのお金が送られてくる。

今日使い切ってしまったえば、あと3日は一文無しで過ごすことになる。こんなに暑い真夏を、作り置きのカレーだけで耐えきるといいうのは無謀だった。

だが明日は、私にとって唯一、人生を実感できる日だった。

こんな日には、普通の人ならば友人や家族からプレゼントをもらい、ケーキのろうそくを消し……。

しかし私には家族も友人もない。当然、そんな有難いシチュエーションなどはない。

ふと横を、黒く光るランドセルを背負った小学生の男の子が、ゲームをしながら母親の隣を歩いていった。

いいな、と奥歯で小さな歯ぎしりをして羨んだ。

私は親の顔を見たことがない。気がついた時には自分の名前だけをどこの誰ともいえない人間から伝えられ、警察やボランティアの保護下に置かれていた。

そこにいると気味が悪くて、高校生になると同時に、勝手に一人暮らしを始めた。

それ以来、人と関わったことなんて記憶の中にはほとんどなかった。

平日でもあいかわらず賑わっている一軒の店の前で私は足を止めた。中へ入ると、冷房のしっかり効いた空気が一気に体を冷やしていく。アンティークなテーブルや椅子が少し暗めの花形ランプに照らされて、艶やかな茶色を描き出している。

その奥に、真っ白なケーキがずらりと並んでいた。

母親にケーキをねだる子供と、少し背が高くて、見上げないと顔の見えないような男性の間に入って、チョコやフルーツの乗った白いスポンジを眺める。端から端まで一つずつ見ていくが、

たった240円で買えるようなケーキは、唯一つ、イチゴとラズベリーの乗ったショートケーキだけ。

もう少し安い店があればよかったが、生憎この近くにはこの店以外

にケーキ屋はない。

「あのー、順番、変わります?」

顔を上げると、テレビに出てきそうなきれいに整った顔立ち、深いブルーの目と黒髪が特徴の、黒いスーツにネクタイといった、正装をした男が私を見ていた。

「あ、いえ……、見てるだけなので、お構いなく」

ぼそぼそ言い放って、ケーキに目を戻す。

しばらくケーキの上ばかりを眺めていたが、頭上に変な違和感を感じてもう一度男の顔を見ると、ブルーの瞳が私を捉えていた。

「私に、何か」

表情の見えないその顔に、妙な嫌悪感を抱いた。まるでストーカーに背後からみられているような錯覚を得る。

「何でも」

本当に何もなかったようにつぶやいた男の唇の左端が、ほんの何ミリかつりあがる。

気味が悪い。ここにいてはいけないと、何故かそんな気がした。

慌てて振り返り、テーブルと客の間をすり抜ける。冷たい空気を押しつけて透明なドアを開けると、現実が押し寄せてきた。

結局、私は鍋に残ったカレーと、コンビニで買った小さなサラダで明日を迎えることになった。

Encounter

翌日、私は学校を休んだ。

とくに嫌なことがあったわけでもなく、ただ休みたかっただけなのだ。

最近は何度も休みと登校を繰り返している。

ほんの15分、歩いていけばすぐに学校の門が見えるのに。

それでも、真夏の暑さとだるさは私を拒んでいた。

ふらりと立ち寄った廃ビル。

ギシギシと音を立てる半壊した階段の手すりに沿って階段を上がり、屋上へと向かう。

工事はまだ手つかずのようで、半年前から人の出入りが途絶えたまま放置されていて、それを知った私は、毎週土曜日になると決まってここへ来るようになった。

屋上の柵は壊れていて、太い紐で無造作に巻かれ、またその紐も何度も飛び越えられたような形跡があった。

また誰かが自殺を図ったらしいことは、小説やドラマに興味のない私でも容易にわかる。紐の下をくぐりぬけて、世界の支配者にでもなったかのように街を見下ろした。

街は平然として私を見つめてくる。数秒してにらめっこに飽きた私は、もつと遠く、地平線を目でなぞった。強めの風が吹いて、手入れのしていない短い黒髪を僅かになびかせる。崖に追い込まれた犯人みたいな気分になった。

あと一步。踏み出せば飛べる。このマンネリ化した世界に、日常にさよならを告げられるのだ。

だがなぜか、足が動かない。この右足を、ほんの少し前に出すだけなのに。

イラついて、ポケットからカッターを取り出す。限界まで刃を出すと、左手首に着けたリストバンドを外す。

現れた、顔の傷よりも深く赤く腫れあがった傷にカッターの刃をあてた。
力を込めると、切れた血管から赤い液体が零れ落ち、その流れは徐々に勢いを増す。

中指を伝って、耐えきれなくなった水滴がビルの真下へと落ちて行った。

ドロドロと流れ出る血液を眺めて、まだ私が生きていることを実感するのだ。

他人から見れば愚かな行動かもしれないが、私にとっては日常なのだ。

死ぬための一步を踏み出せなかった私は、今日も踵を返し、家へ向かう。

「そうか……、誕生日、おめでとう」

ビルを出たとたん、聞き覚えのある声がした。

十字路の斜め前にある公園。そこに昨日の、ケーキ屋にいた不気味な男がいた。

そしてそのそばには小さな男の子。アメをもらってはしゃいでいた。なんだ、人違いか。誕生日の祝いなんて……そんなわけないよな。

私はほっとした。

一気に力が抜ける。血はまだ止まらない。地面に絶えず染みを作っている。

気がつけば、男の子はすでにいなかった。男が一人、公園のベンチに座っている。

私はふらふらと、その男に吸い込まれるように近づいて行った。

「君、昨日の……」

相変わらず、不気味な目をしている。だが昨日とは少し違う、優しいようなものがその男にはあった。

「この近所に住んでるんですか」

「いや、昨日引越してきたんだよ」

「昨日？ ……見たことない人だと思ってたけど、やっぱりそうなんだ」

「君は学生じゃなかったっけ」

学生、その言葉に一瞬頭の中に熱が出る。冷たい熱だ。

「学生ですけど……何か」

「学校は行かなくても良いのか」

「別に。勉強なんかする気ないし」

投げやりな気持ちでそう答えて、男が座っているベンチの端に座る。ズボンに着けていた銀色の星のチェーンがチャリ、と音を立てた。

「失礼だけど、女子高生だよな？」

「そうだよ。男の子だと思った？」

だんだん男の態度がうざったらしくなる。

敬語なんか使ってやるものか。

「……、一瞬ね。でも昨日の制服が印象に残ってたから、すぐわかったよ」

「そう」

尖った卵型の顔には微妙に似合っていないショートヘア、目つきや恰好は男子そのもので、そこに顔の大きな傷跡ともなれば、どこかの不良少年に見間違えられないこともなくはない。また間違えられた、と私は慣れた違和感を押し殺して少し黙りこんでいると、何かをしたいという衝動に駆られた。

試しに、つま先で地面の砂を蹴ってみると、茶色くバサバサとした土が現れた。

面白くなってきて何度も何度も蹴っているうちに、地面に小さな穴ができた。カリカリと器用にその穴を掘っていく。

そうして遊んでいる内に、ふいに男が血の止まりかけた左腕を掴んだ。

「その手……自殺願望？」

慌てて左腕に力を入れて引き戻す。

ズキツと電気が走った。

「痛っ……」

思わず口に出てしまった。まずい。私は嘘だとすぐにわかるような苦笑いで取り繕った。

「痛いんだ。なんでそんなことしたの」

「うるさい。あんたには関係ない」

言い終わる前に、男が私のズボンのポケットからチェーンを引き出す。と、チェーンとともにカッターが零れ落ちた。

「リストカットねえ……随分とマイナーな自殺願望だな」

「うるさいっての」

私はまた黙った。これ以上この男と話していると、心の中をえぐられていくようで気持ちが悪かった。

「君、名前は？」

「名前？ そんなの言う必要はない」

「いいじゃないか。教えてくれても」

「なんでそんなに人の事知りたいの」

「知りたいと思ったただだよ」

男がため息をつく。重いため息ではない、しかしどこかあきれたような雰囲気があった。

「僕はジョン・ドール。君は？」

「……アルセア・キリカ。親がいないから本物かどうかは知らないけど」

「親いないんだ。珍しいね」

「二人とも死んだって。施設の人から聞いた」

「ふうん。アルセア・キリカ……ね」

「フルネームで呼ばれると気持ち悪いんだけど」

ジョンと名乗る男からカッターを取り返した。何事もなかったかのようにチェーンとカッターをしまう。

「明日、休日でしょ。またここで会えない？」

「出会い系か何か？ そういうの興味ないんだけど」

「違うよ。アルセアと話していると面白いからってことさ」

「それと、明日は休日じゃない。明日は”日曜日の恩返し”だ」

日曜日の恩返しとは、地域ごとに行われる収穫祭のようなものだ。通常は秋に行われるのだが、ハイゼン島は夏のこの時期に行われる。地元の住民は参加をしないと呪われる、というあほらしい言い伝えに丸一日拘束されるのだ。農家の人間には盛り上がる祭りだが、日曜日をつぶされる普通のサラリーマンや学生にはつまらない時間ではない。

「日曜日の恩返し？ 明日が？ だったら仕方ないね。6時間後にまたここで会えないかな」

「……いいよ」

「どうも」

すっとジョンは立ち上がり、さっさと歩いて行ってしまった。

True or Lie

6時間後、太陽が西に傾き始める。

昼間の暑さが消え、木陰にあるベンチは冷たさを取り戻していた。さつきと同じベンチの端に座っていると、ジョンが来た。

「お待たせ」

「待つてないよ」

ほら、と男がコンビニの袋を手渡した。中を見ると、棒アイスが一本入っている。

さつき欲しかったんだけど、と嫌味をぶつけてみた。男は苦笑いして、文句言つなよ、と手に持っていた自分のアイスの袋を開ける。人生で二度目のアイス。お昼を口にしていないせいかな、すこしかじると空腹感がよみがえってきた。

オレンジの酸っぱい味が口に広がり、冷たい液体が胃に入っていくのがわかった。

懐かしい、と思った。

初めて食べたのは、小学生の時。施設にいたボランティアの人がくれたものだっただ。

その時はただ、冷たいとしか感じなかったのだが。

「それで、話したいことって何？」

アイスをくれた代償に、少しくらいは話をしてやつても良いだろうという傲慢な考えが浮かぶ。一体どんなつまらない会話になるのだろう、と先読みした漫画をもう一度見るような気分で見ると、

「アルセアは生きていくのがつまらない？」

唐突な質問が来た。つまらない？ あたりまえじゃないか。つまらないからわざわざ死ぬ気分でいたのだ。

「少なくとも楽しいと感じたことはないけど」

「じゃあ命を捨てても良い？」

「……なんの話？ 私は別に構わないけど。やりたいこともないし、

やさしく殺してくれるんだったら本望だよ」

何年も思い続けてきた気持ちを、初めて人の前で口に出した。変な気分だった。

男はしばらく黙って、アイスの袋を2つともコンビニの袋に入れた。ボールみたいにくしゃくしゃと丸め、手首を器用に動かして近くのゴミ箱へ投げ入れた。ビンゴ。ボールはカサリと音を立てて入っていく。男は一瞬腰を浮かしたかと思うと、私の隣へ改めて座りなおしてきた。そして小声で言った。

「おいしい話があるんだけど、ちょっと乗ってみないか？」

「おいしい話？」

「そう、おいしい話。1年間で3億円もらえる話だ」

「は？」

1年間で3億円。一瞬自分の耳さえも疑った。そんなうまい話があるものか。

私はその男の顔を、目をじつくりと、探偵が犯人を探るように見つけた。

「本気で言ってるの？ ものすごい詐欺っぽいんだけど」

「本気だよ。本気じゃなかったら僕は言わない」

「嘘だ。そんな話、絶対有り得ない」

「前払いだから信じてくれると思っただけだなあ」

「前払い？ 私がやるって言ったら今日払ってくれるの？」

「払うよ。もう準備は出来てる」

「初めから私を誘い込むつもりだったの？」

「いや、さっき決めた」

話している内に、だんだん呆れてきた。たった1年間の仕事で、しかも前払い。

こんな話を聞いたら、世の中に飛びつかない人間なんて本当に少ないだろう。

しかも高校生の、節約をしていなければろくに飯にもありつけないような貧乏女を選べるくらいだから、そうとう軽い仕事なのだろう。

いわゆる副業っていうヤツだ。

地面をあるく蟻が私の靴のつま先の影に隠れた。足をのけて見ると、ベンチの脚のすぐ横に、蟻の巣があった。ひたすら餌を運び、巣を守る蟻たち。毎日同じことの繰り返しで、蟻さえも私たちと同じだ。”生きていくのがつまらない？” さっきのジョンの声が思い出された。こんな質問、蟻に聞くことができたら、どんな答えが返ってくるのだろうか。つまらないと思うのだろうか、それとも、この仕事が自分の使命だともいうのだろうか。私が人間だから、心を持つ動物だから、ただつまらないと感じるだけなのだろうか。

「じゃあ……、その3億円、見せてくれたら乗ってあげてもいいよ。役に立つかどうかはわからないけど」

半信半疑のまま、私はそう答えた。

このまま引き下がっても、何も面白いことなんか有りはしない。

私という無駄な命が少しでも役に立つなら、仮に殉職したって構わない。

「交渉成立だ。ついてきなよ、僕らの住んでる所に行こう」

僕ら、ということは他にも誰か同居人がいるのだろうか。まあいいや、そんなことはすぐにわかる。私は速足で歩くジョンに、置いて行かれないようついて行った。

少なくとも私は、このときには自分の身に何が起こるかなんて想像もしなかった。

Brain Install

無言でジョンの後ろを歩き、街並みが見慣れない物になってきた頃、昼間に訪れた廃ビルに似ていなくもない白い建物にたどり着いた。ジョンはポケットから白いカードを取り出し、ドアの横に添えられた赤い箱の溝に差しこんだ。ガチャリ、鍵が開く音がこもって響いた。

無言でジョンがドアを開ける。その中は薄暗く、地下への階段につながっていた。

こつちだよ、と私を連れていく。走って降りたら転げ落ちそうなくらい急な階段を、私たちは降りて行った。その階段の先に、黒く塗られたドアがあった。ジョンはコンコン、と小さくノックをしてから、ドアノブを回す。

「入って」

「え？」

私は思わず変な声を出してしまった。一瞬、ジョンの声と同時にドアが歪んだように見えたのだ。だが良く見ると、ドアには何の変化もなかった。ドアは開いていないし、鍵が開く音もしていない。自分で開ける、ということなのか。ドアノブに手を伸ばす。と、そのドアが目の前から消えた。慌てて手を引っ込める。

その奥は真っ暗で、怪談をしているわけでもないのに背筋に寒気を感じた。

「何これ……」

「心配しなくていい。ドアはただの幻影だから。そのまま入って」この世に幻影など存在するものか。蜃気楼か？ いや、こんな場所に存在するはずがない。恐る恐るドアのあった場所に手を伸ばす。すると、手がその中に入って行った。ごくり、と息を飲み、足を上げて前に踏み出す。

真つ白な光が、一気に私を照らした。

広く、白い部屋が目の前に広がる。その中心に透明のガラスのテーブル。

その周りに女性2人と、食べかけのリンゴを皿に乗せて眺めている男の子が一人座っている。

「あ、やつと来た」

男の子が顔を上げて私を見た。寝不足なのか、疲れた顔をしている。やはり疲れきった声で、

「イマジン、解いていい？」

と言った。男の子の向かい側に座った、Ｔシャツにジーンズというラフな格好をした女の人がうなずいた。

イマジン……、さっきのドアのことか？

後ろを振り返ると、予想通りドアはない。白い壁の一部となって平坦と立っていた。

もう一度男の子の方を振り返って見ると、すでに机に伏して寝ていた。

メイドの恰好をした女性が、お疲れ様、と男の子の髪をなでている。まるで子犬をあやしているようだった。

「座りなよ」

ジョンが部屋の奥から椅子を取り出し、こっち、と目で言う。

言われるがままに座ると、ガラスのテーブルの表面に光っている地図が見えた。

「なにこれ、地図？」

「そうだよ。この街の地図。その真ん中の赤い光が今いる場所だよ」
地図の右下に、小さい赤い光が見えた。非常用ランプみたいに不気味な色をしていた。

「さて、何を話そうか……まずは紹介から、かな」

ジョンはテーブルの中心を指で叩いた。地図が消え、写真付きの証明書に似た図が現れる。写真には、男の子が映っていた。

「この子はタツ。12歳だよ。君と同じ捨て子だ」

苦笑いしながら、ジヨンは指でもう一度テーブルに触れた。今度は、メイドの人だ。

「リーナ・シアン。元家政婦です、よろしく」

につこりとほほ笑んだ。大人にも関わらずそのゆるいウェーブのかかった髪と柔らかそうな顔には可愛らしさがあり、ほっとするような雰囲気を持ち合わせている。

ジヨンと同じブルーの瞳。だがリーナの方がよほど安心させてくれる瞳だった。

続いて、ジーンズの女の人。長い黒髪を後ろで一つに結わえている。しかめっ面が若干怖い。

「ヴァリス・ミラーだ。よろしく、アルセア」

声は低く太い声だったが、思ったより怖くはなかった。むしろ、かつこ良いという表現の方が似合っていた。恰好も、肘をつく仕草も女戦士のようにみえた。

3人の紹介が終わると、リーナがオレンジジュースをグラスに注いでくれた。どうも、と私は会釈をする。

「アルセアの事はジヨンから聞いているわ」

そう言つてリーナはジュースの横に白いカードを置く。

「これでいつでもここに来れるから。あと、ベッドもいくつか空いてるから住んでも構わないわよ」

住んでも構わない、ということはすでにこの4人は一緒に住んでいるのか。

2世帯以上の同居をも嫌う人が増えたこの時代、同居なんてのは珍しい。学校の修学旅行でさえ一人部屋が大半なのだ。私の周りにいる学生は皆、一人残らず寮に住んでいる。

「B I S Tの事ならジヨンか私に聞いてね。何でも答えるから」

「ビスト？」

「B、I、S、T。そう書いてB I S T。ブレインインストールの略称だ。B I S Tの能力を使える人間は、B I S T E R。そう呼ば

れている」

どこから持ってきたのか、ジョンはメモ帳に大きくBIISTと書いた。

「ブレインインストール？ 聞いたことない」

「そりゃ当り前だ。麻薬なんかよりもずっと極秘にされてるからね。麻薬よりも、だなんてかなり怪しいことなのだろうか。例えば軍隊のテロ情報とか……。そんなことはない、きっと安全だ。私は自分にそう言い聞かせた。」

「始めに僕たち”LE”の話をしなきゃいけないね」

ジョンは口の端を上げて、ニヤリと笑う。昨日と同じ、不気味な笑いだ。メモ帳の新しいページを開く。そこには、何度も書き直されたらしい図がページの中心にあった。

Story of LE

今から14年前……ちょっと昔の話なんだけどね、とジョンは言う。ジョンはやや真剣な表情になり、これは大事な話なのだろう、と私も椅子に座りなおした。

「僕の兄……、コーラン・ドールっていう人がいたんだけど、優秀な技術者でブレインインストールっていう能力開発を研究していたんだ。」

14年ほど前、ついにそれが完成して彼は学者の中では一番有名な人物になったんだ」

ジョンは兄の名前を悲しげに呼んだ……もしかしたら私の聞き間違いなのかもしれないが。

「そして”LE”という集まり……いわゆる、ギルドを設立したんだ。各国から優秀で若い人材を集めては、さらにその実験にのめりこんでいった。」

その実験が成功すると同時に、兄はそれを貴族や力を欲した人間に莫大な金額で売り始めたんだ。そのビジネスはかなり成功したんだよ。でもそれから3カ月もたたないうちに、彼に危機が迫った」

一呼吸置いてから水を飲み、また少し間を置いた。

「世界中の倫理委員会にその話が広まって、兄は世界中から追われることになった。」

どうやら売った力で、暴力、テロ事件が多発したらしい。

BISTER達は兄と同じように追われ、捕まっては極秘に処刑されることになった。

BISTは人間を秀でる能力だ。やっぱり人間と同じようには扱われないんだよ。

無残に殺されて、終わった後は生きていた頃の面影すらない」

ごくり、と私は息をのんだ。ジョンの言い方から、この話は本物だと思った。

「そして7年前、僕は兄と同じ年になった。兄は僕に全てを託すと言って、僕に今までの全ての記憶を渡して消えて行ったんだ。わざと姿をさらして、血を吐きながら捕まっていた。無責任な話した。僕は残っていた仲間を集めて国家に対抗した。でももう遅かった。国家も世界中に散らばったBISTERを金でかき集めて僕らを殺そうとしてきた。同胞殺しほど残酷なものはないよ」

すでに千人は殺されている、とジョンは付け足した。その残党がこの4人だというのは。情けない。

「僕らLEはBISTERを作り出す唯一の方法を知っている。能力開発機、CHEST。

そのパスワード、位置情報、そしてBIST本体のインストール方法は全て僕たちだけが知っている。でも僕はもう国家に名を知られている。

どれだけ逃げても、必ずばれてしまうんだ。だから、君を呼んだ」

「何をすればいいの」

私はつじつまの合いすぎた話についていくので精いっぱいだった。

何故か私はこんな自分にできることが何なのか、それだけは聞き逃すまいと必死だった。

「僕の持っている情報を全部受け継いでほしい」

私は疑った。ジョンは国家に処刑されることを前提に、私に全ての情報を託すというのか。それでは、ジョンの兄と同じではないか。

「それだけ？」

「それだけだよ」

ジョンはあっさりと言い切った。でも、とその後が続ける。

「君が情報を持っていることがばれたら、国家に追われることになる」

「でも1年間だけなんですよ」

「そうだね。あと1年間だけだ」

1年間の契約だったことを急に思い出した自分に一瞬驚いた。そういえば、なぜ1年なのだろう。さっきまでのジョンの話が本当なら、

生きている間ずっと追われ続けなければならないはずだ。その疑問を読み取ったようにジョンは答える。

「あと1年で時効が成立するんだよ。3年前、僕はその情報を得るために30人の仲間の命を犠牲にしてしまったんだけれど……」

「ジョンの言う仲間って、駒みたい。その情報が本当かもわからないのに、30人も死んだなんて信じられない」

私は心の奥に小さな熱を感じた。何度見てもジョンの薄く、悲しげな笑いは気持ち悪い。

「そうかもしれない。でも僕は前に決めたんだ。残りが何人になっても、最後は勝ち残るって」

「そのためだけに私も駒になれと？」

ジョンの言葉に怒っているわけではなかった。

私が仮に死ぬような結果になったとしても、この契約のおかげで寿命が若干伸びたと思えば自殺するよりはいいかもしれない、と思っていたからだ。

ただ、駒というのは若干気に入らなかった。他人に動かされるのは嫌いだ。

もうすでに十分他人に動かされてきて、ようやく自由を得られると思ったのに。

それでも、私はジョンを信じていた。なんとなくこの道には光があると感じたのだ。

「ああ。駒を一つ増やしたいんだ。僕の、僕たちの子供じみた逃亡劇に幕を下ろすために」

思っていたより、感じていたよりジョンは素直だった。

「CHESTっていう機械があるんだけど……それはBISTERにとつては心臓と同じなんだよ。CHESTは年中動いている。そして、その中枢だけで全てのBISTERの力の制御をしている。

これがなければ僕たちはBISTERの能力を使うことができないんだ」「壊れたらどうなるの？」

「間違いなく僕たちは皆死ぬよ。言っただろう、これは心臓なんだ

って。

C H I S Tは麻薬やドーパミンと同じ、脳や肺、心臓、血液、皮膚……全てを無理やり活性化させるものだ。そして生まれた力を、僕らの意思で皆動くようにしてやる。その力がB I S Tと僕らが呼んでいるものなんだよ。生命の全てを力ずくで動かしているんだ、B I S Tを手に入れた瞬間から僕たちの体はボロボロになる。脳も心臓も、もう一人じゃ動けないんだ」

恐ろしい話だ。信じようと努力しても信じられない、そんな恐怖が体を駆け巡る。

脳も心臓も一人で動いていたはずなのに、C H E S Tなんていう機械一つで全てが思いのままだなんて。

「それって危なくないの？ 麻薬と同じなら、寿命も短くなるんじゃない」

「もちろん寿命はすり減るよ。今までのデータから見れば、最長でも15年しか生きれないみたいだし」

「短かったら？」

「一番短いのは3年だね。少なくとも3年間の命は保証できるみたいだ。もちろん、力を多用しないことが絶対条件だけど」

「そう」

少し熱が冷めて、私はその話を信じてやろうという気になった。仮に命が3年になったとしても、私の決意は変わらない。

「もう一度確認を取ろうか。質問があればいいよ。B I S T E Rになる気はあるかい？」

「うん、あるよ。自殺するよりはましかもしれないし。こんな奴が役立つっていうのならいくらでも手伝うよ」

「どうも。じゃあこれを」

そう言ってジョンはテーブルの下にあった黒い鞆を取り出した。

「約束通り、3億円の前払いだ」

恐る恐る手を伸ばす。鍵はすでに開いていた。ゆっくりと鞆を開けると、見事な札の束がぎっしりと詰まっていた。

「こんなの見たことないよ」

そりゃそうだ、とジヨンは苦笑いをした。私はすでに氷の溶けたオレンジジュースの残りを口に含んだ。気がつけばリーナとタツがない。眠ったタツをベッドへ連れて行ったのだろうか。

ヴァリスは私たちなどお構いなしにパソコンの画面を見つめていた。何をしているんだろう、としばらく見つめてみると、ヴァリスが私の視線に気づいて、なんだ、と声を掛けてくれた。

「そういえば、ヴァリスはなんでB I S T E R……だっけ、それになったの？」

「友達に誘われたんだ。今はもうここにはいないんだけどね」

今はもうここにはいない。その言葉を聞いて、なんだか探ってはいけないような気がして、私は黙り込んだ。

「ああ、気を悪くしたか？ 気にしないでいいよ、もう昔話にしたつもりだから」

ヴァリスは笑っていた。顔に出た悲しい表情とは裏腹に、私はうらやましいという気持ちでいっぱいだった。そんな風にはいないことを悲しめるような友達がいること自体、私には有り得ないことだったからだ。ボタン、と奥の戸が開く。お盆を片手にリーナが立っていた。

「お話お疲れ様。アルセア、皆夕食よ」

暗い空気を一瞬で払拭する煙がたち上る。白いお皿の上に、クリーム色のスパゲッティがのっている。濃厚なチーズの匂いに誘われて、フォークを手に取った。

一口食べただけで緊張が解けるほどやさしい味だった。間を開けずに何度もそれを口に運ぶ。私は初めてまともな食事を食べた気がした。

食べ終わると同時に、小さな眠気に襲われた。

抵抗する気力はなく、瞼を閉じると意識が徐々に遠のいていく。ジヨンが私の名前を呼んだ気がしたが、心地の良い夜から這い上がる

ことはできなかった。

L i n a

目を覚ますと、白い部屋の白いベッドに寝かされていた。

「あら、目は覚めた？」

聞き覚えのあるやわらかい声。リーナだ。

そばにあった木の椅子にリーナが座っていた。その隣には茶色の振り時計が置かれていた。時計は夜中の2時を指している。

「ごめん、私眠ってた」

「大丈夫。あのスパゲッティには体力回復剤を入れておいたのよ、そのせいで眠くなってしまったのね」

「薬？」

「あなた、手首に怪我してたでしょう」

そうだ、と昨日自分が何をしていたのかを思い出した。いつものように屋上で自殺を図ろうとしていたのだった。

確か傷跡が……ない。何事もなかったように傷が消えている。

「……ありがとう」

「いいのよ、お礼なんて。私にできることをしたまでだわ」

私にできること、か。私にもそんな台詞が言えるような日が来るのかな。

「昨日の話は覚えてる？ ジョンが先走っているんなこと教えちゃったみたいけど」

「なんとなく。リーナもその…… B I S T E R、なんだよね」

そうよ、と言いながらリーナは読んでいた本を閉じる。題名が気になったが、表紙は古く、どこかの国の言語で書かれていて読めなかった。

昨日の記憶が頭の中で再生される。

「じゃぁリーナも自分の心臓とか皮膚を自由に動かせるってこと？」

「目ならできるわよ、簡単に。B I S T E R、って言っても動かしやすい場所は人によっても違うの」

目に影を作っている前髪を少しかき分けて、ブルーの目を私に見せた。

「気持ち悪かったら言っただけ、すぐやめるから」

そんなに気持ち悪いものなのか、とどこぞの大魔王みたいな目を想像していると、リーナの右手に焼き付けられた緑色の”LE”の文字が光った。

目を見開いて、そこに力を入れているのだろう、見る見るうちに充血して赤くなる。

瞳までそれは届き、さらにそれも侵食し始めた。血管は網目のように目を駆け巡り、あふれ出して瞼の上へ、さらに目尻を飛び出して顔の横へと広がっていった。顔の上半分は浮き出した血管に支配され、ブルーの瞳さえも赤く、頬も耳も何もかもが赤く染まっていた。

「こんな感じがしら」

声だけは相変わらずやさしかった。軽くほほ笑むと、リーナは力を抜いた。

充血が引いて、元に戻る。ブルーの瞳がまた光りだした。

「BIISTっていうのはね、脳細胞を一気に活性化させて、体中の神経に指令が送れるようにするの。イメージさえできていれば十分動かすことができるわ。もちろん訓練は必要だけど」

「っでもどうやってBIISTを使うの？ 目が充血しても意味ないと思うけど」

「BIISTはね、体を動かすだけじゃなくてそれを使った2次的能力……例えばそう、昨日タツが幻影を使ってるのを見たでしょ。あの意味超能力みたいなものが使えるようになるの。脳や体に変化が起こると不思議な力がでるものなのよね」

「リーナは？ 何ができるの？」

「透視よ。物を透けて見たり、遠くにあるものを見たり……あとは人の考えが少し見えるの、不完全だけど」

「すごいね。私は何ができるんだろう」

私はBIISTの能力に興味を持った。恐怖もあったが、それ以上の

ものがあるような気がしてならないのだ。

昨日ジョンからもらった3億円の入った鞆が枕の横にある。

よく考えてみれば、あと寿命が15年あったとしても3億円なんて使いきれない。

ジョンはそれをわかっていて私に3億円なんて話を出してきたのだろう。騙された、せこい奴だと私は思った。しかし、今更引く気にはなれない。

「リーナはさ、どうしてBISTERになったの」

「私はジョンの幼馴染なのよ。随分と昔からいろんなことに付き合わされてきたわ」

「寿命だつて短くなるのに？」

リーナは白いクローゼットを開けた。中から、黒いジャケットとプリーツスカート、シャツを取り出した。着換えろ、ということだろうか。素直にそれを受け取ると、私はすぐに服を脱ぎ始めた。

「それでもいいのよ。私はジョンのためなら何が起きてもいいの。むしろあなたの方が心配だわ。」

あなたには、変えようと思えば変えられる人生があるのに……」

全てサイズはぴったりだった。いつの間に揃えたのだろうか。

「変えるなんて無理だ」

「それはすぐには無理かもしれないわ。親がいなくてもお金がなくても、でも、生きてさえいればどこかに希望はあると思うの」

リーナはどこか悲しそうに言う。皆同じ顔だ。人を殺し、人を捨てて逃げるのがそんなに大変なことなのだろうか。

「何それ。そんなものを待つなら、死んだ方がまだだよ。……リー

ナは私をここから追い出したいの？」

私には友達も、大切に思う両親さえいない。一度捨てられたのだから、捨てることなんて私にはなんでもないことだ、と思う。

「できればそうしたい、っていうのが本音ね。アルセアにはこんな運命を背負ってほしくないって思ってるから」

「私はどうなってもいいんだ。あと1年で幸せになれるなら、私は

残りの何十年を捨てても構わない」

吐き捨てるように言葉をばらまいた。リーナは一瞬驚いて、それでもさっきと同じように悲しい笑顔を作った。

「……そう。気持ちは変わらないのね。なら、ついてきて。BIS Tを、始めるわ」

リーナがなぜそんなに私を心配しているのか、全く分からないまま、私はついて行った。

S t a r t

夕食を食べたメインルームの隣には、もう一つ別室があった。

部屋の大きさも、壁の白さも変わらないその部屋の中央に、椅子とその後ろに古い導線できくりつけられた機械の箱が置き去りにされている。

ジョンの指示通りに椅子に座ると、首や手足に赤い首輪をはめられた。

「リーナ、話はすんだのかい」

「終わったわ」

リーナの顔は笑っていなかった。さっき強く言いすぎてしまったせいだろうか。

「じゃあ、始めるよ」

私がつなずくと、ジョンは機械に手を触れた。

「目を閉じて、集中して。すぐ終わるから」

恐る恐る瞼を閉じる。暗闇の中で数秒、とてつもなく長い時間が過ぎた。

もういいのかな、そう思って目を開けようとした瞬間、

バチッ

目の前を光がさく裂した。

「うあああつー！」

火花のはじける音が耳元で何度も聞こえて、鼓膜が千切れそうになる。

頭の中を駆け巡った熱湯のような熱さに、私の体はびくびくと震え始めていた。

落ち着け、とジョンとリーナに無理やり抑えられる。

肺からあふれ出てきた息を残らず吐き切ると、異常なまでの疲労感

に襲われた。

足はまだ痙攣していて、指の先さえ自由に動かない。

朦朧とする意識の中、目をこじ開けるとジョンがニヤリと笑っていた。

遠い声が、響くように頭の中へ伝わってくる。

「インストール完了。ようこそ、わがギルド、LEEへ」
体の重みが、ふっと消えた。

次に目を覚ました時にはもうお昼を過ぎていて、閉められたカーテンからも眩しい光が飛び出していた。

リーナはいなかった。その代わりに、小さなメモ書きが置いてあった。

「起きたらメインルームまで来てね……か」

リーナからもらったジャケットをつかんで、ドアを開ける。

テーブルには昨日と同じように4人がいた。

眠そうだったタツも今日は調子が良いようだ。

「リーナ、アルセア来た」

タツがぶつきらばうに大声でリーナを呼んだ。厨房から出てきたリーナは、私にテーブルに座るよう言った。近づくと、テーブルの真ん中に白い箱が置いてあることに私は気がついた。

椅子に座って、その箱をじっと見つめた。大きくもなく、小さくもなく……手に取れるような丁度良い大きさの箱だった。

まるで私が一昨日立ち寄ったケーキ屋の箱みたいなの……、

箱？

これは、まさか。

「リーナ、これってもしかして」

「開けてごらんない」

私は箱を、中身がくずれないようにそっと開いた。

「うわぁ……」

中には丸いチョコレートケーキが入っていた。見た目だけでもふわふわで柔らかそうなスポンジに、程よくとろけているチョコレート。その上に力カオパウダーと金箔が有り余るくらい振りかけられ、ラズベリーとチョコレートの飾りが綺麗にトッピングされていた。私が見たおもうと思っていたケーキの、何倍もするような高級なものが目の前にある。

「昨日誕生日だったんでしよう、一日遅れだけとおめでとう」

「ありがとう……ってどうしてわかったの」

「さっきBISTの能力を見せたでしょ。その時にあなたの記憶情報が少しだけ見えたのよ」

BISTの力つてすごいな、そう私は感心しながらケーキをほおばった。

「どう、おいしい？」

「うん、こんな甘いのは久しぶりかも」

良かった、とリーナがつぶやくように言った。隣を見ると、タツとヴァリスも同じケーキを食べていた。タツがついて食べているのは、私ができるまでお預けされていたからだろうか。

「今日は天気がいいわ、せっかくだから公園にでもいきましょ？」
「そういえば、今日は」日曜日の恩返し」だった。本当なら今頃学校に行つて、式典の真つ最中……だったはずだ。

まあいいか、と思った。どうせ不幸な人間に不幸が舞い降りたつてどうしようもない。

ただ、月曜日に先生に叱られることだけは覚悟しておこう。

ケーキを食べ終わると、タツが幻覚能力でドアを作ってくれた。

ジョン曰く、この部屋は完全に密室で、私の見ていたベッドルームの窓以外は出入り口はないそうだ。幻覚能力は人に幻覚を見せるだけでなく、物理的な物も排除したり付け加えたりできるらしい。

暗い階段を上がって、リーナとともに外へと出ていく。

久しぶりに外の空気を吸ったような、そんな感覚に私は襲われた。

Romeo Lovias

公園のベンチに座って、小池で泳いでいる小さな魚とベンチの脚に巣を作っている蟻たちを見ながら、リーナと私は”日曜日の恩返し”で永遠と流される音楽をただ聞いていた。うるさいだけのトランペットは無駄によく聞こえるし、太鼓の音は地面を伝わって震えているのがわかってしまう。毎年同じことを繰り返して、いったい何が楽しいのだろう。

「リーナ、ケーキありがとう」

「いいのよ。あのケーキ屋で買うつもりだったのでしょう？」

リーナの良く通った声も今はかき消されかけていた。耳元でかすかに聞こえるほどだ。

別に誰かが喜んで聞くわけでもないのだから、もう少し静かにすれば良いのに、と思う。

「まあね。お金足りなかったから買わなかったけど」

私は苦笑いでごまかした。お金が足りなかったからケーキを買わなかったわけではなかったのだが。

「明日からはBISTの訓練ができるんだよね」

「そうよ、第2次能力まで習得するには1か月程度かかるけど、努力次第でいくらでも早くなるわ」

1か月ならきつくても耐えられそうだと思った。1年の12分の1が消えるといっても良いのだから。

「第2次ってその、幻覚とか透視とかだよね」

「ええ。一般的には第1次能力がオズ、第2次能力がヴァンネ、第3次能力がサラって呼ばれているの」

どうやら能力には名前があるらしい。誰がつけたのだろう、人の名前ばかりだ。

「……あれ、第1次能力はBISTの覚醒で体が変化して、第2次能力は透視とかの能力があるってことは分かったけど、第3次って

何？」

「サラは自然の力を使えるようにするの。ヴァンネまでは体内能力がほとんどなんだけど、サラは例外ね。例えば火を呼び起こしたり、風を集めたり……、外の力を取り寄せるって感じよ」

第3の力。なんだか第6感が備わったみたいで、妙な優越感が染み出てくる。

つまらない日常よりもずっとこっちの方が心地よかった。もう二度とあの場所へは戻りたくは無い、そう私は思っていた。

「そうなんだ。リーナは、サラはどんな力なの？」

「土の変形ね、一言で言うならだけど」

「そっか」

私は黙った。もし私がサラを手に入れることができたなら、一体どんな力が得られるのだろう。漫画の主人公になった気分だ。なんでもできそうな気がした。

……ふと、トランペットの音が聞こえなくなっていた。

おかしい。さっきまでちゃんと聞こえていたのに。

「あら、さっきまで音楽が鳴っていたのに、急に静かになったわね。日曜日の恩返しはもう終わったのかしら」

リーナも不思議そうに首をかしげた。確かに私も違和感を感じている。

祭りは終わった様子もみせず、またいきなり音楽が切れたわけでもなかった。

いつの間にか終わっていたのだ。まだ昼過ぎ、太陽が顔を見せている。

日曜日の恩返しは日没まで続けなければいけないはずだ。

「いつもはもつと遅くまでやってたはずなんだけどなあ……」

何か事件や不具合でもあったのだろうか。静かな空間が、お化け屋敷のような冷たい空気を押し寄せてきた。

「静かなのは、僕が音を消しているからだよ」

不意に低く重い、誰かの声が聞こえた。

「っ誰!？」

背中に走った冷たさを感じて、ベンチから離れる。長身の男がベンチの後ろにいた。

「アルセア、下がって！　あなた、Decade Hallの人間ね」

リーナ、叫ぼうと口を開けかけたまま私は動けなくなった。

ジョンと似た、唇のつり上がった男がリーナの目の前に瞬間移動してきたのだ。

リーナは立ち上がりかけた姿勢のまま、男を睨み続けている。

「そうだよ、正確にはその落ちこぼれみたいなものだけだね……。デイス、つまり10番目だ」

10番目、その言葉が何を意味しているのかは分からなかったが、そんなことよりも私はその男が怖くてたまらなかった。殺気があるのを知らなかった私でさえ、赤い光を発する瞳からはおぞましい何かを感じる。

「デイス……、そう、ついに頭を出してきたのね」

「頭……か。僕は落ちこぼれだから、そんなに強くはないけどね……。しかしよくこんな場所でBISTの話ができるものだ。」

僕がLEの人間なら絶対にしないよ」

LE、BIST……。その言葉を知っていて、しかもリーナを殺そうとしている。

これがジョンの言っていた国家に雇われたBISTERなのか。見た目は細いが、破れた服の隙間から見えた胸元はがっちりとしていて、まさに戦闘系と誇れるような男だ。

緑色に染まった髪、耳には金のピアス、腕には赤い竜の入れ墨、そしてごつごつした指にはざっと数えて20個ほどの指輪が光っている。

どれも、漫画のヤクザにしか思えないほど不気味だった。

「まさかあなたがいるとは思わなかったわ、10年もB I S T E Rでありながら気がつかないなんて。あなたもやるわね」

「違和感もなかったのか。あなたはよほど戦闘に能がないようで」
リーナの顔が一瞬ゆがんだ。今すぐにも殴り倒してやりたい気分だった。

「デイス、侮辱よりあなたの名を先に聞かせて」

「ロメオ・ラヴィアス。僕もあなたに聞きたいことがある。その子はL Eの人間かい？」

「あなたに言う必要はないわ。言わなくても、会話を聞いていたならわかるでしょう」

あくまでも冷静な態度を取り続けるリーナ。その声には余裕がない。男はふん、と鼻を鳴らした。こちらはずいぶんと余裕があるようだ。リーナは一歩前に出て、掌を前に突き出した。

B I S Tの発動だ。

目が見開かれる。血管が膨張して、3秒たらずに顔が真っ赤に染まった。

「気が早いのは良いことだ。でも、焦り過ぎは良くないな」

男もボクサーのような姿勢になる。手に力が込められた気がした。

「死ね」

え？ リーナの声が聞こえる。ドン、と何かが叩かれる音。

はっと我に返った。目の前には、リーナの腹に叩きこまれた拳と、地面の上の赤い血。

男との間には、砕かれた土の壁。

一瞬、何が起こったのか理解できなかった。

赤かったはずのリーナの顔が青い。紫色になった唇からは血が滴り落ちていた。

「ロメオ・ラヴィアス……。あなたは逃がすわけには行かない。私が始末するわ」

苦しそうな声で宣戦布告をするリーナ。私は動けもしなかった。

「それで？ 僕を倒すつもりかい？」

あきれた、と言わんばかりの顔をするロメオ。
「そうよ」

リーナが笑う。弱くも強い、笑みだった。

First Battle

砂場の周り、足元にあった土が盛り上がる。

空中でいくつもの球ができ、同時に土の壁も修復され、円の形を描いた。

カツ、とリーナの目がさらに開かれた。目尻が避ける。血が溢れ出た。

血の塊を吐きだし、拳を前に突き出す。球が矢のごとく、次々に男めがけて飛んだ。

「弱い」

見下すような一言。全て弾かれ、かわされる。

リーナは言葉を失った。血の涙を流したまま、動きを止めている。

「こんな柔らかい球、本当に土でできているのかい？」

落ちた球を拾って、ロメオは握りつぶした。パキンッ、陶器の割れるような音が聞こえた。リーナの息は乱れている。苦しそうに右手で腹部を抑えていた。

「アル、セア……、逃げ、なさい」

逃げられない。足が震えて、力が入らない。

「リーナ、と言ったか……。死ぬ前にあなたの本名を聞いておきたい。上に報告せねばなんのね」

嫌味はリーナの片目を引きつらせた。細い血管が浮き出る。

「リーナ・シアン、よ。私は、死なないわ……。少なくとも、あなたの目の前では、ね」

リーナは嘘が下手だ。強がっているのがバレバレの台詞で舞台を飾っている。土の壁が、また元に戻り始めた。落ちた球が中心に集まって、一つの大きな弾丸を作り出す。

「まだ抵抗するのかい？ 諦めのない人だ」

この男にリーナは逃げることさえできるはずがない。何故かそんな予感がした。

私は震えて、それでも何かできないかと考えた。すでにリーナは私のためだけにいろんなことをしてくれたのだ。

何か、協力できることはないのだろうか。……そうだ。皆を呼びに行けば良いのだ。

私が仮に盾になったところで、リーナが助かることはあり得ない。ただの足手まといだ。走って、逃げるふりをして、ジョンやヴァリスを呼べばこのロメオとやらも倒せるはず。今なら、足は動く。動けるのならば、行かなければ、助けなければならない。気づかれないように、私は足を後ろへとずらしていく。

「せっかくだ、あなた方に僕的能力を見せてあげよう」

ロメオの右手が光り、線香花火のように弾ける。

薬指と中指、小指にも付けられた十数個の指輪がどろりと溶け始めた。

「僕のヴァンネは……、円状の物の形質を変化させることだ。こんな風に、指輪だって溶かすことができる。君の球も、その盾も円の形だ。僕に効きはしない」

「手の内……、そんなに簡単に、明かし、て良いの、かしら？」

「構わないさ。これを言ったところであなたに勝ち目はない。

むしろ、あなたが少しでも抵抗できるように、ハンデを作ってあげてるじゃないか」

ニヤリと歯を見せて笑っていたロメオの後ろを、じりじりと足裏をこすりつけて逃げる機会をうかがう。もう少しと足を下げていた時、コツ、と石に踵があたってしまった。

まずい、ロメオの顔を上目だけでちらりと見る。まだ笑ったままリーナを見下している。気づいていないのか。石を踏みつけてさらに後ろへと引き下がる。砂場から飛び出た砂利が音を立てて抵抗しようにとする。邪魔だ。頼むから静かにしてくれ。リーナが死ぬ前にジョン達のところへ行かなければ……。

「さて、君は一体どこへ行くつもりなんだろうね？」

ギクリ、体が硬直する。ロメオが振り返った。石像と化した足は動

かず、ガクガクと震えている。

「そこから動くなよ。動いたら君も殺す」

「じつとして、死ぬのを待てって言うの？」

「そうだよ」

「……」

足を引きずって、後ろへ下がる。さらにゆっくり、ゆっくりとロメオから距離を取ろうとした。

「動くな！」

ロメオが叫んだ。懐から取り出した銃を私に突き付けた。

「動くなと言ったのが聞こえないのか」

「聞こえてるよ、十分」

奥歯を下でなぞりながら、腰に手を当てる。スカートに付けていたチエーンが、チリ、と音を鳴らした。

ポケットに手を入れるふりをして、中の物をつまみだす。

どうやってこの状況を変えよう、そう思考を巡らせ始めた時、

「余裕だからって、油断は禁物よ」

リーナの声だ。ロメオが振り返る。土の弾丸が頭上に迫っていた。

槍のような形に変わった。ロメオは光る右手を、原形をとどめていないリングのついた指を、それに差し向ける。

今だ。

地面を蹴りつけて、ロメオの背中へと向かう。カッターをポケットから出して、刃を限界まで引き延ばす。

届け！

バキッと刃の割れる音と、少しだが刃が肉にのめりこむ感覚が腕を伝う。

折れた刃が落ちる。

刺せた……のか？ いや、しわのできた服だけが破れて、その先には何もなかった。

ロメオは振り向きもせず、

「そんな物で、強化された皮膚が破けると思ってるのか？ 君はB

ISTERを舐め過ぎだ」

私は信じられなかった。普通の人間なら、この無駄に性能の良い力ツターは簡単に皮膚を切り裂くはずなのに。

ロメオは片手で頭上にあつた槍を、変形したリングを刃に変えていとも簡単に打ち砕く。槍の破片がリーナの肩へ、腕へと突き刺さった。そのままサリと地面に倒れる。

ロメオに脅されていたのさえも忘れて、リーナへ駆け寄ろうとするが、ロメオの太い腕に阻まれた。ぐぎっ……。首をきつく締められて、変な声が漏れた。

「リーナはもうじき死ぬよ。次は君だ。君は手を加える必要もないかな」

殺される。確実に、絶対に、殺される。足を動かそうとするが、何故か感覚がない。

まるで足が消えてしまったかのような。動け、動け、動け……！

「そこまでだ！」

誰かの声が聞こえて、腕の力が緩んだ。体を無理やりひねって抜け出す。

バランスがとれずに四つん這いになって、リーナへ駆け寄った。

Fire sword

「アルセア、無事か!？」

ジョンの声だ。私は目にこびり付く涙を飛ばすように、首を横に振った。

ロメオの前に、立ちはだかったのは二つの影。ジョンと、もう一人はヴァリス。

「お前か」

ヴァリスの低い声が、静まり返った空間に重く響く。右手には柄の黒く染まった刀、左手には錆びたチェーン。それぞれがヴァリスの怒りを表していた。

「へえ、君、アルセアっていうんだ。綺麗な花の名前じゃあないか」
「黙れ! お前などにアルセアと話す権利はない!」

ヴァリスは身をかがめたのも一瞬、地面を蹴って飛ぶ。同時にチェーンを中へ投げ出すと、刀を鞘から抜いた。銀の刃が空気を一閃、風船の割れるような音がさく裂した。ロメオの肩から血しぶきが溢れだす。痛みに叫ぼうとするロメオに、その隙さえも与えない。そばにあった木を踏み台にして飛んだヴァリス。空中でチェーンを掴み、ロメオの傷口をさらに切り裂く。揺れて崩れ落ちる体の周りを、チェーンが取り巻いた。

「これで終わりだ、Decade HallのBISTER。ゆっくりと息絶えていくが良い」

ヴァリスの声と同時に、チェーンがロメオの体を捉え、縛る。

があ……っ、とうめき声だけを残してロメオは倒れた。ぴくりとも動かなくなった。

ヴァリスはロメオの背中を踏みつけ、チェーンを外す。

刀で心臓のあたりを刺して、生きていないのを確認すると私とジョンを見て、

「リーナは無事か?」

さっきの怒りが微塵も見えない冷静さだけで尋ねた。

「ああ。何とか、息はしてる」

「ならば良い」

ジョンはリーナを抱えて、私はヴァリスに連れられて、私たちはLEの白い建物へ戻ることにした。ちらりと後ろを振り返る。ロメオは恐ろしい男だったが、血を流して倒れている姿を見るとどうも放つて置くことができないような雰囲気があった。

「ねえ」

「なんだ」

答えたのはジョンだった。

「この人……の死体、どうするの？」

ジョンは一瞬立ち止まって、

「誰かが処分してくれるさ、僕たちがどうこうする話じゃない」

「……」

何故か後ろめたい気分が心の隅をよぎった。そして何故か落ち着かず、頭をガリガリと引っ掻く。ふと、足元に影が見えた。さっきはなかった影だ。私以外の人は皆、手前にいるから影は私の足元には落ちない。それは私の歩みとはわずかに違うリズムで動いている。まさか、と思った。

「本当に僕は死んでるのかい？」

耳元で、声が聞こえた。音源を探して逃げようとしたが、振り返る時間すら与えられなかった。バシッ、何かで背中を殴られた。前に倒れこむところを、ジョンに支えられる。ヴァリスが刀を抜いて、ロメオに突き付ける。

「お前……、何故、生きている!？」

驚愕の色を隠せないヴァリスの声がぼんやりと聞こえた。いけない、今意識を失ったら殺される。頭を振り、必死に意識を取り戻す。

「ああ、あなたにはまだ伝えてなかったな……。僕のヴァンネは円状の物を変化させることだ。細長いチェーンだって、巻きつく時に

は円状になる。変形させて緩めれば良いだけだ」

「だが私は心臓を突き刺したはずだ！ 血だって出ていたではないか」

「もちろん、血は出ていた。だが……」

笑いを唇に宿したままロメオは続ける。

「残念ながらあなたが最後に刺したのは僕の指輪だ」

驚き、納得のできないヴァリスの目の前に、指輪のないロメオの右手が差し込まれた。

火傷のような跡があり、指が黒く変色している。墨が飛び散ったようにも見えた。

「僕の変形能力さえあれば、死んだように見せるのだって難しくはない。」

むしろそれすら見破れない君たちの力量を疑うよ……」

ヴァリスの舌打ちが聞こえた。そして、ヴァリスの姿が消える。

鋭い刃が、私の目の前を通り過ぎた。遅れて光の線が影となる。

ロメオの姿が消える。ガキンツ、目の前で、刀と硬い何かがぶつかり合っていた。

その何かを引っ搔く不気味な音が響く。

「死ね、死ね、死ね！」

掠れて、妙に迫力の増したロメオの声がヴァリスに迫っている。

ロメオは2本指で円を作り、変形させているようだ。人差し指が銀色に光っている。

ヴァリスは怒りながらも冷静に、作り物の銀色の刃を受け止めている。

足でステップを刻んで、刀を押し切るように前へと刀を振り払う。

一瞬低く踏み込んで前へと跳躍、勢いに身を任せて剣先を突き出した。

ロメオに軽かわされ、しかしバランスを崩さずに両膝を沈ませるように地に足を付ける。漆黒の瞳で標的を睨みつけ、すぐに刀を一振り、目の前へと迫る刃を受け流す。

ロメオから距離を取るように後ろへ飛び、空中で一回転、着地した。地へ手を、片足をつく。

「炎よ、舞い上げれ」

赤色の炎がヴァリスを取り巻いた。

手先からは、バチバチと線香花火のように金色の火の粉が舞い落ちている。

うねる炎が腕を伝い、刀身を伝ってアスファルトの固い地へと溢れだす。

「土の次は炎の演技かい？ 全く、君たちのは愛が足りないよ。僕のサラでこのつまらない舞台を飾ってあげようか」

見下ろすような視線を、ヴァリスは睨み、刀を構える。

ロメオがゆつくりと、まだ指輪の残っている左手を持ち上げる。

ゴクリ、ヴァリスが息を飲み、手に力を入れるのが見えた。

「怒れ、僕の愛よ——」

鈴の音が一回、二回、三回……、どこからか聞こえた。

バサバサと羽を羽ばたかせ、鳥が何匹もロメオに向かって飛んでくる。

左手を空に向かってかざすと、鳥たちは手の甲へ吸い込まれるように入っていく。集まってきた鳥を全て吸収すると、ごつごつしたロメオの腕から金色の羽が生え始めた。

Love circle

金色の羽は肩の皮膚を、首の骨を突き破って巨大化した。古代の絵画にでも出てきそうな天使が、目の前にいた。

「愛を語る割には不気味な天使だな、お前」

ジョンが、私の服を掴んで無理やり後ろへと下がらせた。

ふらふらの足が、うまく着地でできずに崩れて尻もちをついてしまった。ロメオの靴音が、カッン、と耳元で鳴る。顔を上げると、ロメオはジョンの目の前にいた。

「なんつ……！」

こめかみに銃を突き付けられ、硬直したジョン。振り返り、やはり目を見開いたまま固まっているヴァリス。ロメオはその銃口を私の方へとゆっくり移し、もう一方の腕を、獲物を狙う、炎を纏った刀の先へと向けた。

ザンツ！

ロメオが腕を動かすその前に、ヴァリスが動いた。刀を振り、揺らめく炎とともに走り出す。ヴァリスの振った刀を、ロメオは軽々とかわしていく。ガキンツ、銃と羽で、刀を防いだ。片足を振り上げて、ヴァリスを押しつける。二人はバランスを崩し、地面へと倒れこむ。すぐに立ち上がったロメオはヴァリスに銃を向け、引き金を引こうとした。

「打たせないぞ」

ジョンがその前に立ちふさがる。ロメオは頬を引きつらせ、笑った。「それでいいのかい？ 君はアルセアを守るべきだろう」

ロメオが、ジョンの目の前から消えた。私の肩に、冷たい感触が伝わる。

「ひっ……」

銃が頭に突き付けられた。

金縛りにあったように、私の体は動かない。

銃の引き金にかかった指がスローモーションのように動く。

ジョンの舌打ちが、聞こえた。

ズドンッ！

電気の弾けるような音と衝撃が、耳を襲った。音が何も聞こえなくなり、目眩がして景色が歪んだ。

「アルセアッ！」

倒れこんだ声の出ない私を、ジョンが腕で支える。脳を打たれたはずなのに、不思議と意識はなくなっていない。頭を押さえるが、どうやら血は出ていないらしい。

「エアガンか」

ジョンはロメオを睨みつけた。私を支えていた腕に力がこもった。

ロメオは答えない。代わりに、嘲笑と殺気が返ってきた。

「もう一発、残ってるね」

「エアガンなら打つても意味はないだろう。時間稼ぎだとしてもせいぜい数秒が良いところだ」

「どうかな」

ジョンに、銃が向けられた。銃声が響く。

間髪いれずに、ロメオはジョンと私を蹴った。

「くっ……」

衝撃波はジョンの心臓にあたったようだった。

胸を押さえて、苦しそうに息を吐いている。

「この、程度か」

ジョンが立ち上がる。こんな奴と戦うつもりなのか。嫌な胸騒ぎを覚えた私は、ジョンを止めようと手を伸ばしたが、ただ私に笑いかけるだけだった。

ジョンはロメオの方へ歩いていく。

「ヴァリス！」

ジョンの声と同時にヴァリスがロメオを捉える。炎がロメオを取り巻いた。赤い竜巻が獲物を飲みこむ。一瞬の陽動。だがそれでも十分だった。ジョンはロメオを蹴り、首を掴んで地面へと叩きつけた。

「捕えたぞ。これでもう動けないだろう」

私はジョンの元へ駆け寄り、首を抑えつけられているロメオを見下ろした。

「今からお前を連れ帰る。イレイサーが帰還次第、お前の情報を消させてもらう」

ジョンはロメオの手を踏みつけ、太い針状の物を取り出して手首へ刺した。

その痛みに一瞬、唸り声を上げたロメオは、突如笑いだした。

「何が可笑しい？」

ロメオはカツと目を見開いて、ゆつくりと口を動かした。

「本当、に、そ……のてい、ど　　かい？」

私はその時、何が起こったのか理解できなかった。

ロメオの声が耳奥で揺れて、急に膝が崩れた。

息が狂い、視界が滲み、ぼやけて標的をなくし、ため込んでいた汗が噴き出した。

「……なんだ……、声が、音が歪んで……！　お前、何をした！」

私が声を出すより先に、ジョンがかすれた声で叫んだ。

「何度も同じことは言わせないで下さいよ……。僕の力は円状の物を変化させる。」

それが仮に目に見えないものであっても、だ」

ロメオがゆつくりと立ち上がる。針を腕から抜いて、傷口を手で押さえた。

私たちを撃った銃は、いつのまにかその手から消えていた。

「その……銃か！？」

「正解。さっきのは銃から発した円状の空気を変化させて、君たちと僕の間にばらまいただけだ。実際、円に似ていさえすればなんでも良いんだよ。あくまで理論上だけど、空気中の粒子や地球だって変化させられる」

カツ、とロメオの靴が遠ざかっていく。

「どこへ行くつもりだ！」

ヴァリスの怒声が聞こえた。

「上への報告だよ。かわいい花が増えたよ……ってね」

ロメオの最後の声は、あまり良く聞こえなかった。

Island of Rain

静寂が現れた。

私は目の前で起こったことが信じられずに、ただその場に座り込んでいるだけだった。ヴァリスはリーナを抱え、ジョンはふらふらと立ち上がった。

「アルセア、立てるか」

私は座ったまま、声は出さずに頷いた。

ジョンの腕にしがみつき、力の入らない足を無理やり動かした。よろけながらもジョンに連れられ、私たちは外が暗くなるまでひたすら歩き続けて、ようやく白い建物へとたどり着いた。

暗い階段を下り、ドアをすり抜けて真つ白な部屋の壁に囲まれる。

「アルセア、疲れただろう。僕とヴァリスでリーナの治療をするから、しばらくベッドで寝ていてくれ」

別の白い部屋に連れて行かれ、ベッドの上に座らされる。体は動かず、そのまま横に倒れた。

目を閉じると、パタン、と扉のしまる音だけが目の前を過ぎ去った。暗闇の中で、何故かリーナのあの悲しい声が聞こえた。

「アルセアにはこんな運命を背負ってほしくないって思ってるから」

こんな運命……あんな風に戦って、血を流して、そんな運命のことを言っていたのかな、リーナは。

漫画みたいで、でも本当の事で、私は何もできなかった。

震えて、怯えて、ただ見ていることしかできなかった。

でももう後には退くことは出来ないんだ。

それに私は、リーナに言っただ。

「あと1年で幸せになれるなら、私は残りの何十年を捨てても構わない」

こんな私でも誰かの役に立てるなら、そう、死んでもかまわない。そうだ、明日、ヴァリスに聞こう。この力を、BISTを使いこな

す方法を……。

翌朝、ふいに目を覚ました私は、昨日と同じようにリーナが隣で本を読んでいた。

「っリーナ、怪我は……大丈夫なの」

「大丈夫よ、心配しないで。私が油断していたせいで、怖がらせてしまったわね、ごめんなさい」

本を閉じて立ち上がったリーナの腹部には、昨日のような血は見え
ず、痛がっている様子もなかった。

一体どうやってこんなに早く怪我を治したのだろうか……？

「B I S T E R は体中の細胞を活性化しているって言ったでしょ。
だから怪我の回復も早いの」

「そっか……」

寿命が縮まるのは嬉しくなかったが、怪我が治りやすいのは有難い、
私はちよつとこの力を誇らしげに思った。

私たちは部屋を出て、メインルームへいくと、すでにジョン達3人
は皆揃ってテーブルを囲んで座っていた。

リーナは私を座らせると、パンを乗せた籠を持って私の向かい側に
座った。

私がパンを手を取ったのを見計らって、リーナがためらうように、

「アルセア、今日は学校に行きなさい」

「へ？」

学校？　なんでそんなところに？　せつかくあの鬱陶しい場所から
抜け出せたのに？

リーナの言った意味を掴めないでいると、ヴァリスが口を開いた。

「アルセア、昨日の事は覚えているな」

私はうん、とパンをかじりながら頷く。塗りつけたジャムがパンか
ら零れ落ちて少し手に付いてしまった。

「なら、いい。たまにショックで無理やり記憶を消そうとする者も
いるからな」

ヴァリスは私に布巾を渡して、

「今日の午後、引越しを始める。この島を出て、別のところへ行く。放浪生活だが国家から逃れるにはこうするしかないんだ。

お前には悪いとは思うが、今日で学校も、お前の家も見れるのは最後だ」

「そう、なんだ」

落ち込んだふりをして、その裏側では飛びまわりたくなるほどの嬉しさに満ちて、必死に笑いをこらえていた。

こんな場所をようやく離れることができるのだと思うと、口元がゆるみそうになった。

私は手に持っていたパンをすぐさま口に放り込み、飲み込むと立ち上がった。

「タツ、開けてくれる？」

ぶつきらばうな物言いと言うと、タツは無言でうなずいてドアを開けてくれた。

一歩足を踏みだして、一瞬止まってから、

「今すぐ行ってくるよ。会いたい人なんかいないし、先生に辞めることだけ言って帰ってくる」

私は誰の返事も待たずに外へと飛び出した。

階段を駆け上がり、眩しい光の中を走っていく。

誰に教えられたわけではなかったが、何故か学校への道はすぐにわかった。

走って行く途中で、妙に足が軽いことに気がついた。昨日はふらふらで立つことさえできなかったのに。

BISTの力のおかげなのだろうか。とにかく、私は振り返ることもなく学校へ向かった。

校門へたどり着くと、朝練をしている部活動の連中以外は誰もいなさそうで、閑散としていた。げた箱へ行き、靴を履き替え、すぐそばにある職員室のドアをノックした。

「失礼します」

ドアを開けて、中へ入る。私のクラスの担任は、毎朝早くここへ来ていることは知っていた。中には数人の教師と、保健室の先生がいた。

「ティレイル先生」

私が声をかけた担任のティレイル先生は、長い金色の髪を揺らして私を見た。

「何か、アルセア」

ティレイル先生は私を生徒の一員としてまともに見る気はなさそうで、メガネを押さえ、嘲笑うように私の目を、顔を、顔の傷を眺めていた。

腹が立つて何も言えないで黙っていると、ティレイル先生の方が嫌味ったらしく私の手を取って言った。

「何か相談でも？ 気軽に乗ってあげるわよ」

「学校、今日でやめます。ありがとうございます」

必要な一言だけ告げると、無言で3秒ほどティレイル先生の顔を眺めて、啞然としているのを見届けて、何も言わずに職員室を出た。

教室へ行つて、ロッカーから教科書を取り出して、全て窓から投げ捨てる。

バラバラと紙の塊が芝生に落ちていった。全て捨て終わると、私は上履きを脱いで捨てて、げた箱へと走った。

「アルセア！ アルセア・キリカ！」

通るのは最後になるであろう廊下を走りだそうとしたその時、聞いたことのある声が聞こえた。

「やっぱりそうだ。アルセア、昨日祭りに来なかっただろ」

声の主は、私の隣の席に座っているオックスだった。朝練から戻ったばかりのようで、サッカー部の青いユニフォームを着たままだった。

長めの、耳に少しかかった茶髪が汗だか水だかで濡れている。ぼたぼたと水滴が垂れ落ちて、床に小さな水たまりができた。

「別に来なくても何も変わらないんだから、そんなにきつく言わなくても」

「言ってねえよ。お前最近疲れたような顔してたからさ、風邪でも引いたんじゃないかと思ったただだよ」

「わざわざ面倒な心配をしなくても。私、今日で学校辞めるから」
オックスが、ティレイル先生みたいな顔で、は？と眉を寄せたまま固まった。

「な、なんだよ急に。意味わかんねえし。っていうか、学校辞めるって本当か？」

「本当。嘘言ってどうするの」

「親父の転勤、とかなのか？」
しつこい。

さつさとこんな会話を断ち切って、ジョン達のところへ行かなきゃいけないのに。

「そんなベタな理由なわけないでしょ。もう学校には行かない。大学にもね。……私はもう決めたの。こんなつまらない生活はやめつつて」

それだけ言い残すと、私はオックスを振り切るように駆けだした。
オックスの叫んだ声が聞こえたような気がしたが、振り返る気はなかった。

何に目を留めることもなく、空気を断ち切ってあの白い建物へと目指して走った。

その日の午後、ビルの前に止まった軽自動車に乗って、私たちは知らない場所へと移動を始めた。

後部座席の窓際に、寝ているタツを隣に私は座った。

見慣れた景色はやがて知らないものとなって、外の景色を見るのも飽きて瞼を閉じた。

膝に乗せていた腕の力が抜けて、車の振動でずり落ちる。タツの腕に当たってしまった。触れた場所から、妙な熱が伝わってくる。そ

れはまるで淹れたばかりのお茶のように熱かった。なんだろう、とゆっくり体を起してタツを見ると、風邪をひいたようにタツの体が赤くなっていた。

初めて会った時のように顔色が悪く、ぐったりしている。額に手を乗せると、温かい汗がついた。やはりタツは何かの病気なのだろうか。

会ってからほとんど元気なところを見たことがない。普通の男の子なら、街を走り回っていてもいいようなものなのだが。

為すこともなく右往左往していると、隣にいたリーナが目を覚ました。

「リーナ、タツが……」

「あら、また熱が出たのね」

悲しそうな、いや、見間違いでなければタツを憐れむような、そんな目でタツを見て言った。

「リミットが近づいているな。もって後一カ月といったところか」

気がつけば助手席にいたヴァリスが私とタツを見ていた。

「リミット？ それってこの熱と関係あるの」

「ある。BISTERはいつまでもその力を使い続けられるわけじゃないんだ。人が使える力の容量には限界ってものがある。

それを越えると、こんな風に熱が出て体中の細胞が破壊される」

「その限界が、リミットってこと？」

そうだ、とヴァリスは頷いて、視線を前へと戻す。

「リミットが来たら、どうなるの」

「死ぬ。最後には内部の温度が50度を超えて、砂になって消えるんだ」

砂になって消える。一瞬、私は何も言えずに固まってしまった。何か熱いものが、胸の奥からじわじわと這い上がってくるのを感じた。死の恐怖なんて捨てたと思っていたのに。

「消える……って、死体とか残らないの？」

「残らないよ。ロメオと戦った時、私たちが死体をそのまま放置し

ようとしていたのは覚えているか？」

昨日起こったことをゆっくりと思いだす。ロメオに襲われて、リーナが殺されかけて……。随分前のことのように思えた記憶が、徐々によみがえってきた。

「あ……、う、うん。ロメオが死んでいたら砂になる。だからあれは放つとしても大丈夫なはずだったってこと？」

「ああ。まさかあれで死んでなかったとは思わなかったがな」

仕方ないさ、とジョンがハンドルを回しながら言った。リミットがあることを皆知っているのに、私以外は冷静で、誰も心配などしてないようだった。死の心配だけじゃなくて、タツのことさえ当り前のこととして扱っているように見えたのだ。

タツの熱を測っているリーナの目にも、すでに表情はなかった。

「な、なんで皆そんなに冷静なの。仲間が死ぬかもしれないのに……」

……

そう言うてから、私は何かまずいことを言ってしまった気がした。

車の中に静かな、重い空気が漂う。

「冷静じゃないと、やってられないんだ。君はなかったかもしれないが、僕たちは何十人と死体を見てきてるんだよ。」

愛した人も、助けあった仲間もこうやって消えていくんだ」

喉から絞り出したような声で、ジョンは言った。そうだ、皆悲しくないわけじゃないんだ。感情を殺さなければいけないくらい、悲しいんだ。

ジョンの言葉を聞いて初めて、皆の気持ちがあったような気がした。ジョンと初めて会ったときから感じていた妙な違和感は、殺した感情の残骸だったのだろう。時々皆の声に出る悲しさも、同じだったんだ。きっと私も、ここにいる限りはそれを体験することになるんだ。

昨日みたいな戦いで、もし誰かが死んだら……。

そんなことを考えていたら、右目から温かいものが零れ落ちた。そっと手で触れると、透明な液体が指を伝って服を濡らした。

「泣くなよ、こっちまで涙が出てきそうだ」

ヴァリスの声が聞こえた。そうだね、と心の中で呟いてから、涙を拭う。服に小さな染みができてしまった。

「着いたぞ。全員降りろ。リーナ、タツを下ろしてやってくれ」

ジョンが車のエンジンを止める。私たちはすぐに車から降りて、トランクから荷物……といっても数少ない服と食料だけだったが、手分けをして出した。

着いた場所は、小さな宿屋だった。雨、と木の看板に墨で書かれている。荷物を中へ運ぼうとすると、ポツ、と冷たい雨が降ってきた。空を見上げると、黒い曇り空が迫ってきている。慌てて宿の中へ入ると、急に外の地面を大量の雨が打ちつけ始めた。

荷物を引きずりながらジョン達の後ろをついていくと、奥の部屋から私よりも背の低いお婆さんが出てきた。

「おう、よく来たね、来月になればまた日が照るからそれまで辛抱だの……。おや、君は見えない顔だね。新入りかい？」

見た目よりも早口でしゃべるお婆さんは、杖によっかかりながら首を突き出して私を見上げてきた。思わずのけ反ってしまったが、なんとか首を縦に振ると、

「ふん、せいぜいがんばりな。ここの島にいる間はあるまじ外に出るのは勧めないよ。一日中雨は降ってるし、年にほんの数日しか日が照らないんだからね」

雨の降り続ける島、なんて耳にはしたことはあったけど、実際に目で見るのは初めてだ。別に雨は嫌いではないが、外に出るのは面倒そうだし、

こんな場所で昨日みたいな戦いはしたくないと思った。私は荷物を部屋に入れて、机の上の埃をはたきながら、

「日が照らないって……、そんなにひどいんだ」

「神様のやることだからひどいってわけじゃないさ。ただ日が照らないだけだよ。それに来月は日照りの日がある。それまで辛抱だ」お婆さんはそう言い残すと、また夕食時に、とそそくさと部屋から

出て行ってしまった。残された私たちは借りた二つの部屋に荷物を分け、入口に近いほうの部屋をリーナとヴァリスと、3人で使うことにした。

私はリーナに言われるまま持ってきた洋服を棚の中にしまいながら、「あのお婆さん、皆の事知ってたけど……何かの知り合い？」

「そうよ。今日みたいに世界中の島を移動するとなると毎回宿を見つけるのは大変だから、LEの中の誰かに知り合いがいれば、その人に部屋を借りることにしてるのよ」

リーナは少し濡れた私の髪をタオルで拭いて、

「今のお婆さんは私の友達だった人の叔母なのよ。BISTERの事は少しだけ知ってるわ」

「そっか」

きつと何度もここへ来たことがあるのだろう、私以外は皆、この部屋の扱いに慣れているようだった。場所を探すことも迷うことなく荷物の整理なんかをしている。とまどっているのは私だけだ。片付けが終わって、やることもなく床に座っていると、

「しばらくタツの様子を見てくるわ。アルセア、ヴァリスとしばらくここにいて」

「うん」

リーナが急に立ち上がって部屋を出て行った。

薄いガラスの張られた窓から、縁に肘を引つ掛けて外を眺めた。曇り空が、果てしなく遠くまで続いている。その恐ろしさを感じると、肌に寒気がした。元いた場所とはそんなに離れていないはずなのに、本当に別の世界へ来てしまったみたいだった。

そしてもう帰ることのできない、帰ることができたとしてもそれは1年後の話で、あの場所がほんの一瞬だけ、懐かしくなった。

ちらりと目線を来た方向へ動かして、それからまた雲の続く空を私は眺め始めた。

Brainer

雨の島へ来てから、丸2日がたった。

昨日は風や雨が今にも窓を突き破って入ってくるのではないかと思うくらいのひどい土砂降りで、凍えるような寒さに襲われた。部屋の壁にかかっているカレンダーがなければ、真冬だと錯覚してしまっていただろう。

今日は雨も少し落ち着いて、ようやく静かに睡眠をとることができずだった。だが、私はなぜか真夜中に目が覚めてしまって、何度目を閉じても寝付けない。この旅館に入ってから一度も外に出ていない上、何もすることがなくただリーナからもらった本を読んでいるだけだったから、体内時計が狂っているようだった。もそもそと布団から這い出して、枕のそばに置いていた本を手にとった。栞のある場所を探そうとしたが、何度指で本の上側をなぞってもわからなかった。部屋には明かりが全くなかったから、とりあえず部屋の外に出た。あまり部屋の外には出たことがなかったから、未だにこの旅館の他の部屋の場所とかは良く知らなかったが、食事に行くときに良く通る縁側にはランタンがいくつか柱にかけてあったのは知っていた。

縁側に座って、明かりに本を照らして栞を探す。
あった。

落としたわけではなかったようだ。ちゃんと本の間に挟まっていた。端のほだけかけた赤い栞が、本の隙間にぴったりと埋まっていた。この本はどこかの国の冒険小説を訳したもので、教養の少ない私でも普通に読めるものだったが分厚くてあと3日間は読み終わりそうになかった。

起きてしまったついでに1ページでも読み進めようと思い、最後に読んだ行を探していると、

「アルセア、こんな時間に読書か？」

後ろからヴアリスに声をかけられた。薄いカーディガンに片方だけ腕を通し、もう一方の腕は後ろに落ちたカーディガンの袖を探している。そういえば、今日もヴアリスの恰好はＴシャツにジーンズだ。昨日や一昨日も同じ服を着ていたような気がする。まさか着換えていないなんてことは……と思ったが、あえて考えないようにしようと思った。

「あ……、ちよつと、眠れなくて」

「そうか。旅行は初めてか？」

「うん、でも平気。別の島に行ってみたって思ってたこともあるし」

本当はそんなこと、一度も思ったことはなかった。それよりも自分の両親がどんな人だったのか、何故自分だけが何も知らされずにこんな場所にいるのか、ただそれだけが知りたくて、いつもそのことだけが頭を巡っていた。だから、本当の事がわかるまでは絶対にハイゼン島からは出て行きたくないと思っていた。だがその割にはあつさりと、何故だかは自分でもよくわからなかったが、その気持ちは吹っ切れてしまった。引越しをすると聞いた瞬間に、自分を縛っていた鎖が切れたような気がしたのだ。

「それなら良いんだ。こつちに着いてからお前の調子が悪そうに見えるな、心配だったんだが……大丈夫そうだな」

ヴアリスは私の隣に座って、しばらく黙っていた。私がようやく１ページを読み終えてページをめくると、

「アルセア、本当なら明後日くらいから始めようと思っていたんだが、B I S Tを使う練習を今日からやろうと思う。この前のような襲撃がないとは限らないしな」

「じゃあ今日はジョンもここにいないの？」

この旅館の中では、夕食時以外でジョンと顔を合わせることがなかった。買い物に行っているのか、どこかの部屋に籠っているのか……。話すこともなかったから、何をしているのかは全くよく分からなかった。

「いや、今日も出かけていると思う。リーナもジョンと出かけるって言ってたからな、私がお前に付き合うよ」

今日はリーナもいないのか。そう思うと、心の中に妙な隙間ができたような気がした。

「あ、あのさ、聞きたいことがあるんだけど」

「なんだ？」

「BISTERの能力が3段階あるっていつのは分かった。けど、それ以外にもあるの？」

ヴァリスはしばらく腕を組んで考えてから、

「簡単にいえば、BISTには4つの能力がある。そのうちの3つ、オズ、ヴァンネ、サラの3段階の能力はお前もすでに聞いているだろう。」

そしてもう一つ……、BISTの中でも最も特有な能力、それがBRAINERというものだ」

「ブレイナー？」

「そうだ。脳をコンピューターのように扱う能力なんだが、6種類存在する。ただし、1人1種類しか持つことはできない……手を試してみる」

私が右手を突き出すと、ヴァリスはポケットから小さな物体を取り出した。ハンコのようなものが棒の先にくっついていて、そこには大きく黒い文字でLEと描かれていた。

「これって？」

「私たちはマーカールと呼んでいるんだが、焼印みたいなものだ。といても熱くはないから心配しなくて良い」

手を取りそれを甲に押し付ける。すると、パチパチと光が弾けて線香花火のように散った。やがて光は消え、ゆっくりとそれを手から離すとそこにはLEの文字が水色に光っていた。

「これは……？」

「水色か。スキャナーだな、お前は」

じわじわと文字の光が消えていく。完全にそれが消えた後、手の甲

をさすってみたが何も感じることは出来なかった。

「スキャナーって、絵とか読み取るアレ？」

「まあ、やることは同じだな。スキャナーは相手の脳にある情報を、そのまま自分の方にコピーできるんだ」

「ふうん。敵の情報とかもそれで読み取れるってわけだ」

「そういうことだ。ただ、これを使うには一定の条件が必要なんだ」
「条件？」

「ちよつと待つてろ、といってヴァリスは部屋へ戻って行った。すぐにリュックを手に戻ってくると、中から包帯を取り出した。

「BRAINERの条件は、第一に、相手と自分が動かないこと。BRAINERを使うには集中力がある。どちらか一方が動いてしまつと、情報が読み取れない上、失敗すれば自らの脳を破壊してしまつこともあり得る」

説明の合間に、ヴァリスは私の右手に包帯を薄く巻きつけ、戦闘の時以外は付けておけ、と言った。隠さなければいけないのなら何故手に押したんだと聞いたが、答えてはくれなかった。

「第二に、情報を読み取る相手が生きていること。死んでしまつと脳内の信号が受け取れなくなつて、情報を読み取ることができない。そして第三に、……これは私たちでも忘れがちなんだが、自分の脳の容量が、受け取る情報量を越えないことだ。越えてしまった場合はすぐにいらぬ情報をイレイサーっていう、情報を消す能力を持つBRAINERに消してもらふ必要がある。第一条件と同様に脳が破壊される危険性があるからな」

脳の容量を越える？ 人の脳は普段ほんの少ししか力を使つてないからパンクしない、なんてことをどこかで聞いた気がするけど、やつぱりBRAINERになつたらパンクするんだろうか。体中が活性化してるとかなんとかで、脳が壊れてしまふんだろうか。

「この3つだけは絶対に守ってほしい。でないと、力を使った瞬間にあの世行きだ」

ヴァリスがここまで真面目な顔をしているのはロメオと戦つた時以

来だ。もしかしたらこの条件を忘れて死んだBISTERがいたのかもしれない。

「結構使用範囲は狭いんだ。もうちょっと使い道があるのかと思っただけ」

「使い方を間違えさえしなければ問題はない。それに、使えないと思ったら大間違いだ。一人敵を捕まえられれば他の敵や国家の情報 that 得られるかもしれないんだからな」

「使い方を間違えなければ、か。なんだか爆薬でも扱っているような気分になって、果たしてそんなことができるかどうか一瞬不安になった。ヴァリスに不安な顔を見られないように、空に浮かんでいる雲に目をそらした。

「それに、お前がスキャナーなら話は早い。契約の条件、覚えているか？ あの時は詳しいことは話さなかったが、今話してやろう」

「あれって、えつと、CHEST……だよね、その情報を渡すとか何とかって言うてたのは覚えてるけど」

「合ってるかな、と半信半疑のまま答えてからヴァリスの方を見ると、怒ったような顔をして、

「そう、それだ。CHESTっていうのは私たちBISTERの心臓だ。国家はCHESTを壊してBISTER全員の処刑を望んでいるようだがな」

とヴァリスは胸に手を当てて言った。

「でもCHESTってあの機械の箱でしょ？ あんなの、すぐに見つかって壊されるんじゃない」

「CHESTは簡単には壊せないんだ。無理に物理的に破壊しようとするれば、半径一キロメートル内にいる人間に向かって電撃と毒が発せられる。小さい箱にしか見えないだろうがとんでもない代物なんだ」

「でも壊す方法があるんでしょ？ だから国家はLEを狙ってる」

「そうだね。あれを使ったり、停止させたりするには5万桁の暗号を入力し、CHESTを操作できる必要がある。それを知っている

のはCHESTの主であるジョンだけなんだ」

5万桁。人間の記憶で果たしてそんなことが可能なんだろうか？

いくらBISTERとはいえ、それが出来るとは信じがたい。

「BISTERの脳は普通の人よりはるかに活発だ。記憶力や言葉の理解力も当然、計算力なんかも飛躍的に上がっているんだ。だからほら、私とこうして話しても話についてこれるだろう？ BISTERになる前の君は、私たちの言っていたことなんか1割くらいしかわからなかったはずだ。もちろん知らなかったってこともあるんだろうが」

確かにそうかもしれない。初めてヴァリスやリーナと話した時は、ほとんど何もわからなかった。

「お前には、その暗号とCHESTの操作方法をジョンから受け取ってほしいんだ。それが出来次第イレイサーにジョンの情報を消してもらおう」

「なんとなく、わかった。要するに、ジョンの代わりに私がCHESTの主になればいいんだね」

「そうだ。敵に悟られないよう、できるだけ早く情報を移したいからな。そうでないとジョンが戦えない」

「だから今日からその特訓をする、と。出来るだけやってみる」

「ありがとう」

私はうん、とだけ答えて本の続きを読もうとして、ふとさっき聞きそびれたことを思い出した。

「ヴァリス、さっき言ってたBRAINERの条件だっけ、その…

…自分の脳の容量ってどうやってわかるの？」

「それはトレーニングの中で教えた方が早い。また後でな」

夜明けが来たらすぐに始める。早く寝ろ。ぼん、と私の肩に手を置いて、ヴァリスは部屋へ戻っていった。

……早く寝ろ、か。初めて言われたな、そんなこと。

胸の奥が鎮まるのを感じて、ため息をついた。それからぼんの何分

か、東の方を見ていた。

雨と雲の合間に見えた太陽が、遠くから薄い光でこの島を照らしていた。

あと1時間で夜明けか。

私は柱に寄りかかって、そのまま目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2404v/>

Brain Install -ブレインインストール-

2011年11月13日11時09分発行